

---

# 照葉と未苗

辰野さとる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

照葉と未苗

### 【著者名】

辰野せとる

### 【あらすじ】

千字前後の百合短編の連作（予定）。照葉てるはと未苗みなえという女の子の、不安だつたり希望だつたりがちらほら見える日常のお話。名言や逸話を拾ってきて、それを軸にした話作りを心がけるとおもいます。

## ひとつめ（前書き）

ほのかに百合。女の子が『一緒にいる』ところの重音を置いた感じです。恋愛ものと友情ものの間で、恋愛寄り？ ぐらいです。

## ひとりきり

定期テスト前。

照葉と未苗は、一緒にこたつに入つて問題集を解いている。こたつの温度は少し低め。未苗の家のこたつは小さくて、お互いの体温がほのかに感じられる。

「うー、わたしも照葉ちゃんみたいに勉強できたらなあ」未苗はぺたん、と机に突つ伏してしまつ。長い間考えているのは苦手だった。

「私になつても仕方ないわよ。例えば、そうね。ガーシュワインとラヴェルの話をしましようか」

「だれ？」

「作曲家。ガーシュワインは独学ですごい作曲家になつたんだけど、やつぱりプロに教えてもらいたいと思つてたの。それで、有名な作曲家だったラヴェルに教えてもらおうとしたんだけど、『あなたはもう一流のガーシュワインなんだから、一流のラヴェルになる必要はないでしょ』って言われたのよ」

ちよつとは未苗の気分が晴れるかな、といつ照葉の期待とは裏腹に、未苗はさらに考え込んでしまう。

「ううん……」

「ちよつとわかりにくかつた?」

「わかった! それじゃあ、わたし『照葉ちゃんの恋人』じゃいけないね!」

「え、あの、どうして……?」

照葉の心に、ふわふわとした綿菓子のような、とらえどころのない不安が浮かぶ。

未苗は照葉にとつて、憧れの女の子だった。元気で、可愛らしくて、純粋で。閉じこもつてしまいがちな照葉と違つて、未苗はどんどん先へと進んでいくことができる。

照葉が一番憧れていたのは未苗のそんな姿であり、恐れているのもそれだった。

心を碎いて紡ぎあげた、なによりも守りたいこの関係。それが、小さなきつかけで変わってしまうような気がして。

「ガードさんも、ラヴェルさんも、世界でただひとりきりなんだよ。恋人なら何人でも作れるけど、同じ子はひとりもいない。考えたくないけど……照葉ちゃんの恋人になれる人って、わたしのほかにもいると思う。だけど、『照葉ちゃんの未苗』になれるのはわたしだけだよね」

「……私の恋人は、これからもずっと未苗だけよ」

未苗にとつても、そうだったらしいな。

照葉は寒さに震える手で、こたつの中の未苗の手を握った。繋いだ手を通して、温もりを伝え合つ。

目には見えないけれど、確かに一人は繋がっている。

「えへへ、ありがと」

そんな、冬の日。

## てふくわ (福井)

「んなんばっかりかよ？」

「んなんばっかりです！」

「たぶん！」

## てぶくろ

指先から寒さが染み込むよつな冬の朝。

「手、つなげー。」

未苗に屈託のない笑顔で見つめられて、照葉は動搖してしまつ。

「へ、うん……こいよ」

付き合いつ前から、手を繋ぐ事は多かった。それはとても普通なことで、当たり前の行為だった。

けれど、意識して手を繋いひとつと思つと、どうしても上手くいかない。

結局、未苗の手を握ろうとして、照葉の手は空を掴んでしまつ。

「照葉ちゃん、どうしたの？」

「『めんなさい』私、どうやって手を握つたりいのが、わからなくなっちゃって」

わたし、なんて情けないんだろう。照葉は内気な自分が嫌になつて、雪に覆われた地面を見下ろした。

知つている場所なのに、雪に覆われているだけで、踏み出すのがこわい。

「んー、きっと考えすぎなんだと思つよ

「でも、考えないと、怖くて……なにか、間違えてしまいそうだ

「ねえ照葉ちゃん、キスの仕方、知つてる?」

「知つてるけど、そんなの、わからないわ。したこと、ないし……」

照葉の心臓がはじけそつになつて、顔を真っ赤に染める。

二人は付き合い始めて口が浅い。キスなんてした事がないし、照葉は未苗と一緒に出掛けるだけでも緊張してしまつ。友達よりも遠ざかつたように見えるほど。

けれど、一人の心の距離は付き合いつ前よりずっと近い。

「手を繋ぐのも、キスするのも、そんなに難しいことじゃないよ。

でも、考へてもわからないかも。だつて、わたし手の繋ぎ方なんて習つたことないもん

だからね、と未苗は続ける。

「してみればわかるし、してみないとわからないよー。ほりー。」

未苗は照葉の手をしつかりと握り、笑いかける。

照葉はガラスに触れるような慎重さで、分厚い手袋越しに未苗の手を握り返した。

「ね？ もう握れるでしょ？」

「うん……臆病で、ごめんなさい」

「臆病でもいいよ。そういうことも含めて、照葉ちゃんのこと、全部好きだからー。」

ぱらぱらと、小さな花びらのような雪が舞い散る。

「私も、その、未苗のこと……全部好きだから」

照葉は赤くなつた顔をマフラーで半分隠したが、ただでさえ熱くなつていた顔がもつと熱くなつてしまつた。

学校には、まだ着かない。

## 氷のよつな恋（前書き）

かじこめぬです。

## 水のような恋

テストが終わった週末。一人は照葉の部屋で話をしていた。

これは、付き合い始めた二人の一番大切な儀式。話題はなんでもいい。「人のこと、家族のこと、そして、世界のこと。大小さまざまことを、一人で向き合って真剣に話し合つ。

好き合っているからといって、相手が自分と同じことを考えていると思い込むのはよくない。お互いが別の人間なのだから、同じになることなんてありえない。

だからこそ、こうしてお互いの同じじじい、違うじじいを確認する儀式が必要なのだ。

「恋って、なんのかな？」

今日の話題は、恋の話。持ち出したのは未苗の方だった。

「プラトンによれば、恋とは狂氣らしいよ。恋することで、人は自分を制御できなくなってしまうの」

「照葉ちゃんは……いま、自分を制御できないの？」

「い、いや、ええと、それは、たとえ話だから」

慌てる照葉を見て、未苗はふふっと悪戯っぽく笑う。照葉は少しだけむくれながらも、未苗のことを怒れない。

そうやつて笑っている時の未苗を、一番愛おしく思つてゐるから。

「でも、プラトンさんは恋が悪いものだつて言つてるの？」

「ううん。恋は、神様からの素敵なものなんだつて」

「それじゃあ、わたしが照葉ちゃんと一緒にいられるのは、神様のおかげなんだ！ 素敵だね！」

照葉は顔を真っ赤に染めて、しかし未苗の方からは目を逸らさない。ずっと恥ずかしさに負けっぱなしのは嫌だったのだ。

「ねえ、未苗はどう思うの？ 恋について」

「わたし？ んーとね、わたしは恋つていうのがなんなのか、よくわからなかつた。でも、照葉ちゃんのおかげで、少しだけわかっ

たんだ！」

今度こそ耐え切れずに俯いて、照葉は熱に浮かされた頭でぼんやりと考  
える。

わたしにとつて、恋つてなんなんだりつ。

照葉は未苗に出会うまで、これほどまでに狂おしく他人のことを  
考えた事はなかつた。かけがえのない存在、と言うなら、家族もそ  
うだと思う。普通の友達だつて大切だ。

けれど、照葉は未苗に恋している。

それはとても不思議な感情で、照葉がよく知つてゐる哲学の巨人  
や科学者たちは、照葉にとつての答えを見せてはくれなかつた。た  
だ、今抱いている気持ちが恋なのだと、照葉は断言することができ  
る。

「照葉ちゃんが好きつて言つてくれたとき、わたしすゞく嬉しか  
つたよ。わたしが好きつて答えたとき、照葉ちゃんも同じくらい嬉  
しいつて思つてくれたらしいなつて思つた。それが恋なんぢやない  
かなあ？」

同じにはなれないけれど、同じ気持ちを抱いていたい。  
そんな気持ちが恋なのかもしれないな、と照葉は思つて、なんと  
はなしに口が開いた。

「私、未苗のこと、好きだよ」

「うん。わたしも」

二人の恋は、まだ形のない水のようだ。けれどその水は透き通つ  
ついて、温かい。

## ながれるもの（前書き）

ショートストーリーが続くだけだと思っていたら、どうも話に起伏をつけたくなってきたようですね（作者が）

## ながれるもの

「きれいな花だね！」

道端に、雪に紛れるよつた純白の水仙が咲いていた。

「うん……」

照葉は夢心地で未苗の横顔を見つめている。未苗の瞳は希望の火で満たされていて、溶けかけた雪など溶かしてしまいそうだ。その燃えるような宝玉の瞳を見るたび、照葉の心には嫉妬の炎が燃え移っていた。未苗が希望を振りまくたび、照葉の心は深い沼に沈むようだった。

しかし、それは少し前までの話。

「ねえ、照葉ちゃんはなにかに嫉妬することって、ある？」

「え……それは、あるけど」

「わたしは、すごく嫉妬しがちなんだ。自分でもかつて悪いなって思うけど、劣等感っていうのかな、そういうのが強くて」いつも笑顔を絶やさない未苗にそんな一面があるなんて、照葉は思つてみたこともなかつた。嫉妬と恐怖に苛まれ続けているのは、自分だけだと思つていたのだ。

「こうやって綺麗な花を見るだけでも、自分がみじめに思えちゃうときがあるんだ。少し前までは、照葉ちゃんのことを見るのも辛かつたよ。照葉ちゃんつて毅然としてて、かつてよくて。だらしないわたしとは大違い。そんなことを思つて、憧れたり、嫉妬したりしてた」

「今も、そう思つてる？」

「ううん。今はぜんぜん思わないよ。だって、憧れの人だつた照葉ちゃんが、わたしのことを認めてくれてるから。そうしたら、劣等感なんてなくなつちゃつた」

未苗に笑いかけられて、照葉の心はじわりじわりと温まつていく。

「ね、未苗。わたしもずっと、嫉妬してたんだよ。未苗が楽しそ

うにいろんなものを見るたび、未苗に見られているのがわたしじやないつていうのが悲しくて、見られているものが妬ましくて。でもね、今は未苗が見てくれるってわかるから、嫉妬なんてしてないよ

「へへ、ありがと、照葉ちゃん。なんかやな話になっちゃって、ごめんね」

「ううん、いいよ。話せるだけ、たくさん話そう。未苗と話せるだけで、私は幸せだから」

二人は手を繋いで、家路を歩み始める。

セルバンテスの言葉に、『嫉妬のない愛はあるかもしけぬ。だが恐れのともなわぬ愛はない』というものがある。

確かに、今の二人に嫉妬はない。一人の心は限りなく近いここにあつて、恋の水はどこまでも透き通っている。濁った妬みや嫉みは水の外から入る余地もない。

けれど、なにかが水に入つてくる恐怖。そして、溺れてしまいそうな恐怖は、常に一人に付きまとつている。恐怖が形を持つのはいつかわからぬが、いずれその時は来る。

水は、流れずにはいられないのだ。

遠くから学校のチャイムが響いてくる。

どうか、ずっと鳴り響いていてほしいと、一人は願つた。この幸せな時間が、いつまでも続きますように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8007z/>

---

照葉と未苗

2011年12月29日22時51分発行